日本古写経データベースの構築とその意義

林寺 正俊
北海道大学大学院 文学研究科

日本古写経データベースは、国際仏教学大学院大学（東京都文京区）を拠点として進められている日本古写経の調査研究プロジェクトによって構築され、2010 年から公開されている。執筆者はプロジェクトのメンバーとして日本古写経データベースの構築に関わったので、本稿では、当データベース構築の経緯、そのための基礎作業（調査・撮影）、利用環境、仏典研究におけるその意義、今後の課題について述べる。

Construction of the Old Japanese Manuscripts Database and its Significance

Shoshun Hayashidera
Graduate School of Letters
Hokkaido University

The Old Japanese Manuscripts Database, which was constructed by the research projects based at the International College for Postgraduate Buddhist Studies (Tokyo), has been available since 2010. On behalf of the projects in this paper I shall state the backgrounds on how the projects began, the main objective of the projects, how the database was made, how it works, its significance in the Buddhist studies, and task in the near future.

１．はじめに

大正時代から順次刊行された漢文大蔵経の活字本『大正新脩大蔵経』（全 85 巻）は、仏教学をはじめ人文系の各学問領域に広く貢献してきた、わが国が世界に誇る出版物である。この『大正新脩大蔵経』の底本には 13 世紀に刊行された高麗版一切経（再雕本）が採用され、対校本として宋版、元版、明版などの刊本一切経が用いられている。正倉院聖語蔵などの古写経や江戸時代の刊本などが対校されている場合もあるが、基本的には高麗本に依拠している。『大正新脩大蔵経』が刊行されてから今日に至るまで、仏典の研究は世界的にほぼみなこの活字本に基づいて行われてきた。ただし、欧米や中国においては 20 世紀初頭に発見された敦煌仏教写本を利用した仏典研究も徐々に進展してきた点は注意されなくてはならない。それに対して、寺院などに数多くの古写経が伝存するわが国においては、古写経の文化財・美術品としての価値は高く評価されながらも、古写経を仏典研究に利用しようという動きはほとんど無かったと言っても過言ではない。ところが、1990 年代から日本古写経のテキストとしての価値が徐々に明らかにされるようになってきたのである。その端緒となったのは、中国ですでに散逸してしまった数々の貴重な仏典や、同じ経題を冠しながらも『大正新脩大蔵経』などの従来の諸テキストとは全く異なる内容を有する仏典が、実に日本古写経中に陸続と発見されたことである。

２．日本古写経の調査研究プロジェクト

以上の新事実を発見した落合俊典教授（国際仏教学大学院大学）は、仏教研究における日本古写経のテキストとしての価値と、日本古写経に関する総合的な調査・研究の必要性とを認識し、文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業・学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」プロジェクト（2005 年 8 月～2010 年 3 月）を申請した。このプロジェクトは採択され、ここに日本古写経の調査と研究が組織的に進められることとなった。当プロジェクトは 2010 年 3 月をもって終了したが、その後も、後継となる文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東アジア仏教写本研究拠点の形成」プロジェクト（2010 年 4 月～2015 年 3 月）が採択され、現在もその事業は継続されている。両プロジェクトには国内外の研究者や大学院生らが

(c) Information Processing Society of Japan

数多く関わっているが、本稿の執筆者自身も学術フロンティア・プロジェクトの当初より研究員として調査と研究に従事する機会に恵まれ、日本古写経データベースの構築作業にも関与してきたので、以下には当データベースについて若干の解説を行いたい。

３．日本古写経データベースの構築

(1)プロジェクトの目標

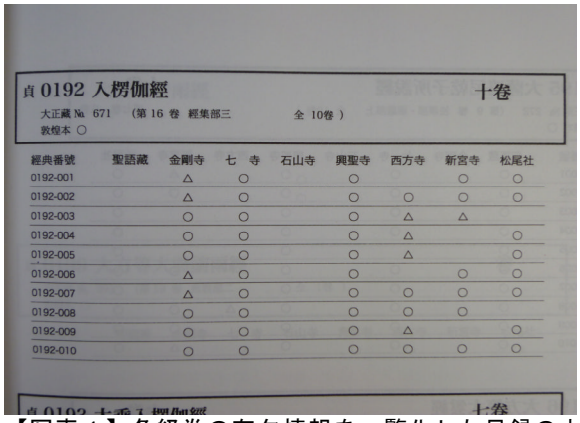
上述のプロジェクトの最大かつ最終的な目標は、９世紀初頭に弘法大師空海（774－835）によってもたらされた経典目録である『貞元録』[注１]（西紀 800 年撰）に拠って、各種の版本一切経が刊行されるよりも前の、唐代一切経の全体像（約五千三百巻から成る）をまさに日本古写経を用いて復元することにある。とはいえ、各寺院に伝存している貴重な古写経を、現物のままどこか一カ所に集めて復元しようなどということは到底できるはずもない。そこで企図されたのが、古写経をデジタル撮影し、その画像を集積することによってデータベースを構築することだったのである。

(2) 一切経の対照目録の作成

各寺院の一切経は相当数のものが今日まで伝存されてきたとはいえ、紛失している経巻も必ずその中に含まれており、一寺院の一切経だけによって一切経全体を復元することは実際のところ不可能である。そこで、まず『貞元録』に記載される約五千三百の経巻ごとに、各寺院に蔵されている一切経の存欠や保存状態を一覧化した対照目録を作る必要があったのである。具体的には、すでに報告書の出されている以下の八種の一切経を対象として、その情報を整理した。八種の一切経とは、①正倉院聖語蔵、②金剛寺一切経（大阪府河内長野市）、③七寺一切経（名古屋市）、④石山寺一切経（滋賀県大津市）、⑤興聖寺一切経（京都市）、⑥西方寺一切経（奈良県大和郡山市）、⑦新宮寺一切経（宮城県名取市）、⑧松尾社一切経（京都市・妙蓮寺所蔵）である。それぞれの存欠情報は、①奈良帝室博物館正倉院掛『正倉院聖語蔵経巻目録』（1929 年）、②海野圭介「金剛寺一切経目録(暫定版)」(落合俊典『金剛寺一切経の基礎的研究と新出仏典の研究(科研費基盤研究 A-1 研究成果報告書)』2004 年)、③七寺一切経保存会『尾張史料 七寺一切経目録』（1968 年）、④石山寺文化財綜合調査団『石山寺の研究 一切経篇』（1978 年）、⑤京都府教育委員会『興聖寺一切経調査報告書』（1998 年）、⑥大和郡山市教育委員会『西方寺所蔵一切経調査報告書』（1984 年）、⑦東北歴史資料館『名取新宮寺一切経調査報告書』（1980 年）、⑧中尾堯編『京都妙蓮寺蔵『松尾社一切経』調査報告書』（1997 年）、という既刊の報告書類に基づいた。

この対照目録は経巻ごとに存欠が一覧できるようになっており（写真１）、ここにさらに敦煌仏教文献の有無の情報も追加して、『日本現存八種一切経対照目録』(暫定第二版、2006 年)として出版した。当目録は現在 PDF でホームページよりダウンロードすることができるようになっている[注２]。

八種の一切経の存欠を経巻ごとに一覧化した当目録は、一切経の調査や撮影を進める際の不可欠なツールであるとともに、後述するように日本古写経データベースの基本的な枠組みとしても用いられている。



貞 0192 入楞伽經　十卷

大正藏 No. 671 （第 16 卷 經集部三　全 10卷）

敦煌本 ○

經典番號	聖語藏	金剛寺	七 寺	石山寺	興聖寺	西方寺	新宮寺	松尾社
0192-001		△	○		○		○	○
0192-002		△	○		○	○	○	○
0192-003		○	○		○	△	△	
0192-004		○	○		○	△		○
0192-005		○	○		○	△		○
0192-006		△	○		○		○	○
0192-007		△	○		○	○	○	○
0192-008		○	○		○	○	○	
0192-009		○	○		○	△		○
0192-010		○	○		○	○	○	○

【写真１】各経巻の存欠情報を一覧化した目録の中身（空欄は経巻の不在、○と△はそれぞれ現存している経巻の保存状態を示す。虫損などがあれば△で示される。）

(3)古写経の実地調査とデジタル撮影

さて、『日本現存八種一切経対照目録』に基づく古写経一点一点の詳細な調査とデジタル撮影が、データベースの構築には必要不可欠の基礎作業となるのであるが、これがまた労力も費用もかかる、なかなかに大変な作業なのである。

本稿では、学術フロンティア・プロジェクトが集中的に力を注いで調査と撮影を行った金剛寺一切経を中心に、実際にどのように作業が進められたのかについて説明しよう。

(c) Information Processing Society of Japan

現場の作業手順としては、どの寺院の場合でもだいたい同様なのであるが、まず経典の収められた箱を経蔵や宝物庫から調査・撮影を行う部屋へと運び出さなくてはならない。金剛寺の場合、一切経は中性紙製の箱に収められており、それらを宝物庫から毎回運び出すのである（写真２）。



【写真２】金剛寺一切経の経箱を運搬する作業

七寺一切経の場合は、写真３のように、唐櫃(からびつ)に収められているのであるが、この唐櫃自体が重要文化財に指定されているため、中身の経典のみならず、唐櫃そのものに対しても非常に慎重な取扱いが求められる。しかも、経典が収められた唐櫃はかなりの重さがあり、男性二人がかりであっても運搬には相当な注意と筋力とを要する。



【写真３】七寺の経蔵内部。それぞれの唐櫃に一切経が収められている。唐櫃自体が重要文化財。

経箱や唐櫃を調査部屋まで運び出した後、各経巻の調査と撮影が行われることになるが、以下にはそれぞれの概要について簡単に説明したい。

①調査　経巻ごとに調書を作成するのが最初の基礎作業である。具体的には、経巻を形作る料紙一紙ずつの長さや界線の幅や高さなど（法量）をメジャーで正確に計測し、さらに経題や奥書、状態（虫損、水濡れの有無）などを確認しながら、一巻ずつ調書を取るのである。その上で、従来の経典と内容的に同一かどうかを判定するために、とりわけ経巻の冒頭と末尾の本文内容を十数行程度チェックする作業が行なわれる（写真４）。こうした作業の中で、従来の経典と同じ標題を有しながらも、内容の異なる特殊な経典などが発見されることもある。



【写真４】古写経調査の様子（経巻の法量を計測したり、パソコンを利用して従来の経典と同内容かどうかをチェックする。）

②撮影　基本的には、以上のような調査作業を終えた経巻が撮影へと回されることになる。経巻の撮影には、ニコンの D2X というデジタル一眼レフカメラを使用している。撮影作業は、次の写真に示されるように原則として３人のチームで行なう（写真５）。中央には古写経の上にガラス板を置いてシャッターを切る撮影担当者、その左には経巻の未撮影部分を送り出す人、右には撮影し終わった部分を巻き取る人というように、役割を分担するのである。これによって撮影の効率を上げるとともに、デリケートな紙で出来ている貴重な古写経をより丁寧に扱うべく細心の注意を払いながら撮影を進めるのである。

(c) Information Processing Society of Japan


【写真５】３人の役割分担で行う撮影作業

以上のようにして一切経の調査と撮影が進められるのであるが、相当量のまとまった一切経が伝存している寺院のうち、現在までにその調査と撮影をすべて終了することができたのは金剛寺一切経である。金剛寺一切経は平安末期から鎌倉後期にかけて断続的に書写された写経群で約 4500 巻が現存しているが、その撮影がすべて完了したのは学術フロンティア・プロジェクトの開始から４年半が経った 2009 年秋のことであった。

ちなみに、この期間に行われた金剛寺一切経調査の日数と参加人数を年度毎に示すならば次の通りである。

平成 17 年度　全 27 日　のべ 300 人
平成 18 年度　全 30 日　のべ 416 人
平成 19 年度　全 22 日　のべ 226 人
平成 20 年度　全 22 日　のべ 234 人
平成 21 年度　全 14 日　のべ 145 人

合計すると、実に 115 日の日数と、のべ 1321 人の参加者数になる[注３]。一寺院の一切経の調査と撮影が完了するまでに、どれほど多くの時間と人員を要するかが以上によって知られるであろう。もちろん関西在住の研究者や学生も参加しているが、基本的には東京から出張して現地で調査・撮影を行うのであるから、交通費をはじめとする諸経費も膨大なものとなる。こうした事情は、他の一切経の調査・撮影の場合もほぼ同様である。

(4) 撮影データの集積状況

金剛寺一切経についてはすべての経巻のデジタル撮影が終了したが、他の寺院の一切経については、残念ながら完了の目処が立っていない。名古屋の七寺には平安末期書写の一切経が 4954 巻現存しているが、これまでに撮影を終えることができたのはそのうちの約３分の１程度である。七寺に関しても、これまでに相当な日数をかけて調査・撮影作業が行なわれてはいるが、すべての作業が完了するまでの道のりはまだ遠いと言わざるを得ない。このほか、西方寺や興聖寺などの一切経についても調査と撮影が継続的に行なわれているが、日数が限られているなどの諸事情により、集積されたデジタル画像の数は限定的である。

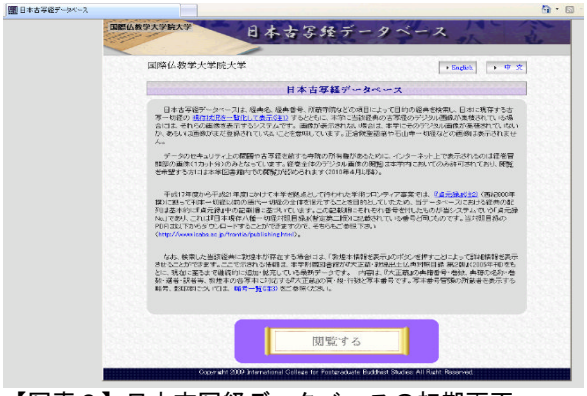
４．日本古写経データベースの利用

日本古写経データベースは、経典番号や経典名によって目的の経典を検索し、データベース内に当該経典のデジタル画像が登録されている場合にはその画像が表示されるシステムである。これは学術フロンティア・プロジェクトの最終年度に株式会社堀内カラーのシステムによって作成され、2010 年より公開されている。

(1) インターネットでの閲覧

では、日本古写経データベースとはどのようなものなのか。以下には、インターネット上の実際の画面に従いながら説明しよう[注４]。

最初の画面には当データベースの説明が書かれており、この画面下の「閲覧する」というボタンをクリックして検索画面へと移動する（写真６）。

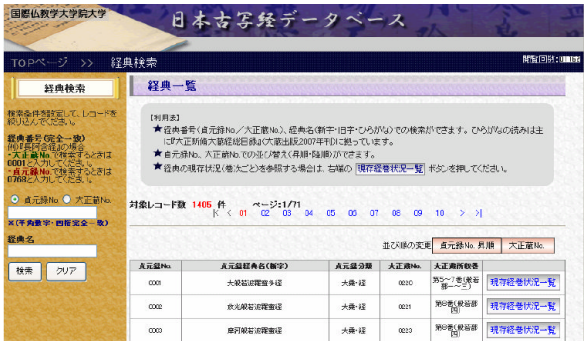


【写真６】日本古写経データベースの初期画面

次の経典検索の画面では、画面の左側に入力欄が設けられており、経典番号や経典名による検索ができるようになっている（写真７）。経典番号による検索は、学界で広く用いられている『大正新脩大蔵経』の番号でも、あるいは当データベースが基づく『貞元録』の番号（『日本現存八種一切経対照目録』に掲載されている経典番号）でも可能である。

(c) Information Processing Society of Japan

経典名による検索は、新漢字・旧漢字のどちらにも対応しており、また平仮名で読みを入力しても検索できるようになっている。



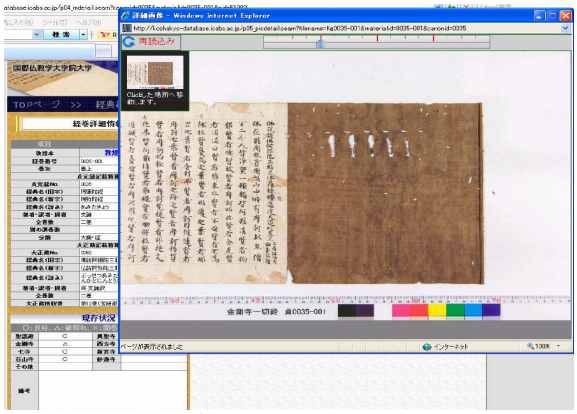
【写真７】経典検索の画面

３の(2)で述べたように、当データベースの基本的な枠組みは『日本現存八種一切経対照目録』（暫定第二版）の一覧表であるが、八種一切経以外の画像データが将来的に追加される可能性があることも考慮して、データベースには「その他」という欄も設けられている（写真８）。八種一切経以外のデジタル画像が実際に追加される場合には、この欄に○や△が付されることになろう。



【写真８】『日本現存八種一切経対照目録』を基盤とした現存経巻状況の一覧。「その他」の欄も新たに設けられた。

経典のデジタル画像は、古写経を蔵する各寺院の所有権、およびデジタル画像データのセキュリティ上の都合があるために、インターネットを通してすべてを公開しないことになっている。ただし、経巻冒頭の JPEG 画像（経典の本文を含む１カット分）については、当データベースのウェブサイト上ですべて公開することになっており（この点については寺院側の承諾も得られている）、これによって当データベースにどのような古写経の画像が登録されているか、また経巻の冒頭の状態（虫損、水濡れ、破損など）や経典の内題などの情報はインターネットを通じて誰でも知ることができるようになっている（写真９）。



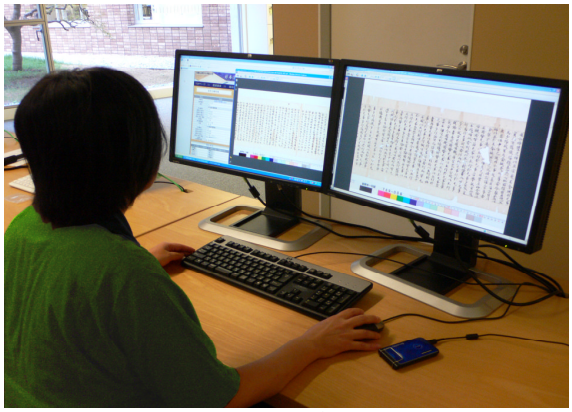
【写真９】ウェブ上で公開されている経巻冒頭の１カット（拡大表示も可能）

(2) 附属図書館での閲覧

冒頭から末尾までの経巻全体のデジタル画像（Raw データを PDF 化した画像ファイル）については、国際仏教学大学院大学の附属図書館内でのみ公開されている。経巻全体の画像を閲覧したいと希望する人は、所定の手続きを経て閲覧することができる。

①手続き　閲覧希望者は希望日時を附属図書館にあらかじめ連絡し、当日持参すべき書類（身分・職分によって異なる）や注意事項について確認する必要がある[注５]。

②専用 PC での閲覧　図書館の窓口で必要書類および利用申込書を提出すれば、あとはデータベース閲覧専用パソコンの前に移動して、古写経の画像を自由に閲覧することができる。この閲覧専用パソコンは両面ディスプレイとなっており、複数の古写経の画像を同時に表示させて比較したり、片方の画面に文字テキストを表示させて古写経の本文と比較したりすることができる（写真 10）。



【写真 10】附属図書館内のデータベース専用 PC

(c) Information Processing Society of Japan

また、このパソコンの近くには『大正新脩大蔵経』をはじめ『中華大蔵経』『磧砂大蔵経』『房山石経』などの各種大蔵経が配架されており、必要に応じて諸本をその場ですぐに取り出して閲覧できるようにもなっている。

③複写　画像ファイルの複製ならびにデジタルカメラによる閲覧画面の撮影は認められていないが、紙媒体の複写は認められている。代金は１枚につき、カラー200 円、モノクロ 100 円である。コピー代としては高いと感じる人がいるかもしれないが、実はこの代金の一部は古写経を有する寺院に納入されるものである。わが国の古写経は、洞窟や砂に埋もれて運良く残った写本とは異なり、先人達のたゆまぬ努力と管理のおかげで今日まで伝えられてきた貴重な文化遺産であり、今日でもなお寺院はさまざまな苦労をしながら古写経を保管・管理しているのである。「無料で公開すべきだ」という意見があるかもしれないが、ただ、古写経の所有権はあくまでも寺院側にあることは注意されなくてはならない。寺院にとっては宝物とも言うべき貴重な古写経を研究資料として使わせてもらおうというのであるから、当プロジェクトとしては、その古写経を大切に守り伝えてきた寺院に対して、たとえ充分ではないにしても何らかの明瞭な形をもって敬意をはらう必要があると考えている。コピー代金は以上のような認識のもとに設定されているのである。

５．日本古写経データベースの意義

研究者が古写経を自分の研究に用いようとする場合、みずから直接寺院に赴いて研究対象の経典を一つ一つ調査・撮影しなくてはならないが、この作業だけでも実に相当な労力と費用がかかる。しかも、問題はそればかりではない。そもそも古写経の実地調査と閲覧にはかなりハードルの高い面があり、たとえ研究者が寺院に直接赴いたとしても、寺院側との面識や信頼関係が無ければ、寺院の所有する宝物たる古写経をただちに調査・閲覧させてもらえるとは限らないのである。ましてやその撮影ともなればなおさらのことである。そのような意味で、日本古写経データベースは、広く研究者に対して古写経閲覧の機会を提供するという重要な意義を担っていると言えよう。しかも、将来的には、複数の古写経のデジタル画像が当データベースに集積されて閲覧できるようになるのであるから、研究者個々人の実地調査の労力と経済的負担が大幅に減るばかりではなく、複数の古写経を用いた漢文仏典の文献学的なテキスト研究も大きく進展することが期待されよう。

６．今後の課題

『大正新脩大蔵経』所収の仏典は瞬時の検索を可能にするデータ化が完了しており（日本の SAT、台湾の CBETA）、また高麗初雕本（約 1800 巻が現存）のデジタル画像もデータベース化され（韓国、高麗大蔵経研究所）、今ここに日本古写経データベースも構築された。こうしてみると、漢文大蔵経のテキスト研究をめぐる環境は急速に整いつつあると言ってよい。

先述した通り、現在のところ日本古写経データベースに収められているのは全撮影の完了した金剛寺一切経（約 4500 巻）の画像のみであるが、本年（2012）度中には大門寺（大阪府茨木市）に伝わる一切経（全 78 巻分）のデジタル画像も新たに登録される予定である。出来る限り多くのデジタル画像を当データベースに登録し、より一層データの拡充をはかっていくことが、今後の課題である。

注

[1]『貞元録』は諸本間に大きな異同が見られ、当目録のテキスト自体に問題が存する。そこで、どのテキストを基本に据えるかがまず問題となるのであるが、当プロジェクトでは、最も善本と考えられる七寺の古写経本を用いている。牧田諦亮監修・落合俊典編集『中国・日本經典章疏目録』（七寺古逸經典研究叢書 第 6 巻、1998 年）を参照。

[2] http://www.icabs.ac.jp/frontia/publishing.html

[3] 金剛寺一切経の調査は、学術フロンティア・プロジェクトのほかにも、科研費の基盤研究 A「金剛寺一切経の基礎的研究と新出仏典の研究」（代表：落合俊典）、同じく基盤研究 A「金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究」（同上）により平成 12 年度から平成 18 年度までの７年間に渡って行われた。したがって、科研費による調査日数と参加者数も含めるならば、本稿に挙げた数字よりもはるかに多いものとなる。

[4] http://koshakyo-database.icabs.ac.jp/index.seam

[5] 図書館の連絡先は以下の通り。電話 03-5981-5277、FAX 03-5981-5284、Email: licabs@icabs.ac.jp

(c) Information Processing Society of Japan